# 《２００９年４月例会報告》

【日　時】2009 年 4 月 25 日（土）18：10～19：50（20：00 頃から「ルン」にてパーティ～23：00 頃）
【会　場】筑波大学附属高校 2F 応接室（東京都文京区大塚 1-9-1）
【テーマ】サロン in 熊野報告＆月例会を考える－月例会 150 回記念企画
　第Ⅰ部　サロン 2002 の月例会 150 回を振り返る
　第Ⅱ部　サロン in 熊野（日本サッカー史シンポジウム）報告
【報告者】中塚義実
【参加者（会員）10名】阿部博一（日本サッカー史研究会）　牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）　金子正彦（会社員）　国島栄市（会社員）　熊谷建志（システムエンジニア）　白井久明（弁護士）　高橋義雄（筑波大学大学院教員）　茅野英一（かながわクラブ）　中塚義実（筑波大学附属高校）　室田真人（会社員）
【報告書作成】室田真人
注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

# サロン in 熊野報告＆月例会を考える

## －月例会 150 回記念企画－

報告者：中塚義実

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜目　次＞

はじめに

**第Ⅰ部　サロン 2002 の月例会 150 回を振り返る**
１．「サロン 2002」の 12 年間
２．月例会のあゆみ①－会員制導入以前
３．月例会のあゆみ②－会員制導入以後
４．サロン 2002 公開シンポジウム
５．「出張サロン」改め「サロン in○○」

**第Ⅱ部　サロン in 熊野報告**
１．サロン in 熊野の概要
２．日本サッカー史シンポジウム
３．シンポジウムのＤＶＤ上映（映像をみながらのコメント）
４．公式参拝等のＤＶＤ上映（映像をみながらのコメント）
５．「八咫烏」と JFA シンボルマークをめぐって

## はじめにー本日の流れ

理事会に引き続き、4 月の月例会を始めたいと思います。

今日のお題は、「サロンの月例会 150 回記念」ということで、月例会をざっと振り返るということが一つです。

もう一つは、3 月に熊野に行ってきまして、非常に面白かったということだけでなく、今後のアクションプランもみえてきましたので、そのあたりの報告も合わせてしたいと思います。熊野には阿部さんも行かれて、シンポジウム報告書のテープ起こしをやってくださいました。阿部さんにも補足していただきながら、進めていきたいと思います。

# 第 I 部．サロン 2002 の月例会 150 回を振り返る

## １．「サロン 2002」の 12 年間（1997~2008）

ほとんどの方にはおなじみだと思いますが、サロンの前身は、日本サッカー協会科学研究委員会のサブグループであった「社・心グループ」の研究会です。「社」は社会学で、「心」は心理学です。それらに関心を持っている人たちの研究会で、1980 年代から活動していました。

ところが 90 年代に差し掛かる頃から、サッカー界の劇的な変化がありました。J リーグの発足、ワールドカップ招致活動、これらによって「みるスポーツ」としてのサッカーが確立します。また、フットサルが出てきて、「するスポーツ」としての広がりもみえてきました。

ちょうど同じ頃からインターネットが普及し、そこにいなくても全国各地の“同志”がネットワーク化されていくようになります。そして、バーチャルなネットワークにはもの足りず、直接会って飲んでしゃべろうぜ、という人たちがこのネットワークに集まってきました。多様な人が集い、研究会の枠組みでは収まりがつかなくなり、「サロン 2002」という名称に改め、1997 年度から活動するに至った次第です。

150 回記念というのは、1997 年度からカウントしています。「社・心グループ」の研究会を入れると、実はもっとあるのです。

2000 年度からは会員制を導入しました。2008 年度は、全国に約 140 名の会員がいました。

主な活動は、月例会・公開シンポジウム・出張サロンの 3 つが大きな柱になっています。

## ２．月例会のあゆみ①ー会員制導入以前

まず、月例会をどのようにやっていたのか、というところから振り返っていくことにします。先ほどの理事会で、月例会の充実という話も出ましたが、やはり原点から確認しておく必要があるでしょう。

原則は、会員自身が持っているネタを提供するということです。もともとは研究グループでした。そこでは、「いま、こういうことに関心を持っていて、こういう研究をしようと思っているのだけどどうだろうか」とか、「面白い文献をみつけたけどどうだろうか」というところが主な話題であり、そういう意味では自分の持ちネタを提供するというのが、これまでも、これからも原則になるのではないかと思います。

そんなわけで、当初は研究報告が中心でした。一つのテーマで 2 時間持たせるのは難しいというこ

とでもあったので、1 回に複数テーマを取り上げていました。

月例会一覧をご覧ください（別紙）。第 1 回目の月例会は、お茶の水大学でやっています。そのときは 3 つのテーマでした。1 つ目の高橋義雄さんが、「日本サッカーにおけるナショナルアイデンティティーの確立に関する研究」です。

高橋：日本のサッカーは、アジアのサッカー、世界のサッカーとどう違うのかということを、ワールドカップ招致活動中に FIFA から求められたのです。これについての研究を、ぼくが学生のころにしていました。

2 つ目のぼく（中塚）の報告は、「韓国社会と 2002 年ワールドカップ」というテーマです。日韓共催のワールドカップが決まった後で、立命館でやったスポーツ社会学会に韓国の研究者がこのテーマで話をし、大変興味深いものだったので、その報告をしました。

3 つ目の榎竜一さんは、この頃は筑波大の大学院生で、「スポンサーの立場からみた巨大スポーツイベント」という研究の中間報告をしてくれました。

だいたいこのような形で月例会は展開していきます。

初年度のテーマを見ていくと、面白いですね。サッカーくじの話が、この頃から出ていたんですね。

そのころ高橋さんは JAWOC におられました。

高橋：そうです。それで、ワールドカップのためのお金をどこから持ってくるか、という議論の中からサッカーくじの金が回せないか、という話が出ていました。

第 6 回は、「2002 年ワールドカップの練習会場（キャンプ地）について」、高知県サッカー協会副会長（当時）の宮村剛史さんが報告してくれました。

どの都市で試合をやるかということだけでなく、選にもれたときにはキャンプ地誘致があるよ、ということをいち早くサロンで取り上げ、高知県でどうですかと話を持ちかけていたんです。高知はプロ野球のキャンプ受け入れの実績もあるし、ちょうどいいのではないかと考えていたのですが、2002 年は高知国体だということで、最終的にはそっちへ向いてしまい、キャンプ地の話はお流れになってしまいました。やればよかったんですけどね。

以下、お配りした「月例会一覧」にあるような感じで初年度展開し、2 年目の 98 年度も様々な話題を取り上げました。番外編では、スコットランドのスポーツ社会学者、Moorhouse という研究者が来られて情報交換をしたこともありました。参加者も話題も多様化し、99 年度を迎えます。

1999 年 1 月に、初めてサロン 2002 そのものがテーマになりました。「サロン 2002 のこれまでとこれから」というテーマ設定です。サロンの月例会にいろんな人が来るようになり、話題も多岐におよぶ。会員制でなく、参加費も取っていない状況で、知らず知らずのうちにネットワークが広がっていたんです。しかし、ある意味収拾がつかなくなりはじめていたのかもしれません。これからサロンはどこへ向かっていけばよいのか、という話をこのときにしたのです。

その頃は NPO 法ができるかできないか、という状況で、法律ができる前でした。けどすでに、サロンの法人化という話もしていました。結論を言うと、サロンの法人化は、時期尚早だが、ただ話し合いをするだけでなく、何かアクションを起こせるような方向性を今後も考えていこうということになりました。それは今も継続中です。

そして会員制導入に向けて準備を始めることになりました。そのためには会員資格を明確にし、組織としての体裁を整え、誰がメンバーなのかがわかるように名簿を作り、個々の会員が情報の発信者となれるようにメーリングリストを開設するなど、この頃から本格的に動き出しました。

月例会については、議論を深めるために 1 回 1 テーマにすることになりました。参加費 1,000 円を

集めて、準備して発表してくれた発表者に謝金として 10,000 円を払うという形になりました。ここで初めてサロンでお金が動くようになります。

そして、99 年度末の 3 月例会で、「サロン 2002（Ver.2000～2001）について」の議論をし、これをベースとして、2000 年度から会員制のサロンとなっていきます。

## ３．月例会のあゆみ②－会員制導入以後

2000 年度より、会員制が導入されました。月例会費は、引き続き 1,000 円。話題提供者に 10,000 円、報告書作成者に 5,000 円が支払われます。会員には、月例会案内と報告が配信される、という今日の形ができました。

その年のクリスマスに、本多さんがホームページを作成してくれました。このとき以来、ホームページ上でサロンの月例会報告書を掲載することになりましたので、会員のメリットが一つ失われました。つまり、それまでは会員だけが手にすることができた報告でしたけど、ホームページにアップするようにしたので、会員のメリットは「月例会案内が届く」ことだけになったのです。だけどそれは大切なメリットなので、いまも月例会案内は会員にのみ配信しています。もちろん会員が自分自身の判断で、「この人は会員じゃないけどたぶん興味を持ってくれるだろう」という人に声をかけて参加を促すのはもちろん OK です。会員じゃなくても月例会には参加できます。

2001 年度からは、月例会の拡大バージョンとして「公開シンポジウム」を開催しています。最初は、「コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム」でした。新潟と鹿島と横浜で、それぞれコンフェデレーションズカップの運営に携わった人や市民団体の人たちが集まり、2002 年へ向けてのネットワーク作りに貢献したのではないかと思います。

ただ、サロン自身は、“2002”を掲げながら、2002 年に向けて何かできたかというと、大してできなかったんですね。というよりも、個々の会員が、それぞれの本業で、ワールドカップにどっぷりとつかっていました。

その後も月例会はほぼ月 1 回ペースで行われ、2004 年度に 100 回記念となりました。その頃発刊された 2004 年度公開シンポジウム報告書『toto を活かそう！』の中にサロンのあゆみを載せています。これをみていただくと、大まかなあゆみがわかるのではないかと思います。

回数を気にすることなく数年が経過し、気がつけば今回で 150 回になるのですが、その間も小さな動きがありました。

会員外の初回参加者の参加費を無料にしたのは 2007 年度からです。未会員を誘いやすくしたわけです。月例会経由で入会という流れを作ろうとしました。

関西サロンも始まりました。2～3 回やって今はお休みになっていますが、地方への広がりが見られます。

高橋さんと熊谷さんが名古屋にいたときに、「Salon de TOKAI」をやっていました。ホームページでもかなりアクティブに活動されていました。異動で人がいなくなるとなかなかね…。

熊谷：みんな東京にきちゃいました（笑）

「サロン 2002in 新潟」というのもありました。「Alliance2002」という団体が行う月例会に、サロンの名称を用いたものです。転勤族であったサロン会員の小島裕範さんを中心にやっていたのですが、彼が転勤で大阪に行ってしまうと継続できなくなってしまいました。

「出張サロン」も各地で開催しました。サロンの地方展開の柱となる活動です。

## ４．サロン 2002　公開シンポジウム

2001 年度に始まった公開シンポジウムは、月例会の拡大版と言えるものです。月例会の開催案内は会員限定の情報（会員の責任で案内を転送することはある）ですが、公開シンポジウムは幅広く告知します。参加するにあたって、通常の月例会では会員の紹介が必要ですが、公開シンポジウムはオープンです。毎回、報告書を冊子の形で作成しています。

簡単にこれまでのテーマを振り返ってみましょう。

2001 年度は、コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム「2002 年とその先のメッセージ」。

2002 年度は、東京と神戸で開催し、FIFA ワールドカップ総括シンポジウム「ささえる物語」と「観戦と交流の物語」でした。

2003 年度は、ワールドカップ後は地域で育てるということで、「地域で育てるこれからのスポーツ環境」。

2004 年度は、「toto を活かそう！」。

2005 年度は、デットマール・クラマーさんにお越しいただいて、「クラマーさん、ありがとう！」。

2006 年度は、「2006 年　ドイツで感じたこと」。

2007 年度は、「サッカー観戦を楽しもうースタジアム編」。

2008 年度は、1 月 31 日に開催した「地域からみた J リーグ百年構想」です。

このような感じで毎年やっています。

今年度も、公開シンポジウムは一つの柱と位置付けてやっていきたいと思っています。

## ５．「出張サロン」改め「サロン in〇〇」

「出張サロン」と呼ばれてきた、サロン会員が地方に出向いて、地元の方々と交流を図る活動も、月例会の変形バージョンと位置付け行ってきました。ただ、「出張サロン」という言い方は、東京にいる私（中塚）からするとお出かけだから「出張」と呼んでいるだけなのですが、地元からすると出張でも何でもありません。そこで正式には「サロン in〇〇」と呼ぶことにしました。

サロン 2002 になってからは、1998 年度の「鹿島」が最初ではないかと思います。「月例会一覧」にもありますが、第 22 回月例会です。

しかしその前年、1997 年度の月例会第 5 回目に J ヴィレッジに行っているんです。この年にオープンしたばかりの J ヴィレッジで“合宿”を開いたんです。合宿と出張の違いは何かと言われると、それほど深い違いはないんですけど、地元の人とコラボするのが出張で、自分たちが勝手に行って盛り上がっているのが合宿だというぐらいでしょうか。

本当はその前の年（1996 年）にも合宿をやりました。高橋さんも参加されたと思いますが、伊豆の今井浜海岸です。それはただ単に海で泳いで飲んでいただけなんですけどね。ただ、夜のトークは、もちろん濃いフットボールネタが満載でした。

なぜ 98 年の鹿島から出張なのかというと、実はこのときも自分たちで行って、自分たちでワーワーやっておしまいだったのですが、1 泊 2 日の 2 日目に、鹿島市のフットサル大会に出場しているんです。また話題提供者の一人である長岡茂さんが当時アントラーズの運営をされており、アントラーズのクラブハウスで、地元におられる長岡さんに、アントラーズのあゆみを聞くということを地元の人とのコラボと考え、「出張」と呼んでいるのです。

翌年の 99 年度に出かけた新潟と掛川は、地元の人たちとかなり濃いコラボができました。新潟は、その次の年も行き、99 年に蒔いた種がどうなったかを確認できました。新潟の市民団体の方々は、ワ

ールドカップ開催を前に、地元をどうやったら活性化できるか悩んでいました。それで、首都圏ではコート固定式フットサルという仕組みがあって、毎週何曜日の何時にここに来れば必ずフットサルをやっているという仕掛けを紹介したところ、参加された新潟の方が「それはいい」と、さっそく“もくはちクラブ”を作りました。毎週木曜日の夜 8 時に、アルビレックスのフットサルコートでフットサルをするという企画です。翌年の出張サロン in 新潟では、ぼくらも“もくはちクラブ”に参加しました。“もくはちクラブ”は、いまも続いています。

以下、2001 年度は清水・神戸、2002 年度は刈谷・（神戸＝シンポジウム）、2003 年度は大分・（両国）、2004 年度は伊香保・成岩、2005 年は名古屋と続いていきます。

そして 2006 年度は、とうとう海外進出、フランクフルトで行いました。牛木さんがコーディネートしてくれました。いま思うとメチャクチャな集合場所なんですけど「フランクフルト中央駅の 11 番ホームを出たところ」。あるのかどうかわからないけど、サッカーはイレブンだから 11 番だ！ということです。このときは、言い出しっぺである私が完全に遅刻しました。というのも、時間に余裕があったから、午前中にケルン観光をしていたところ、新幹線に乗り損ねて、1 時間くらい遅刻してしまったのです。フランクフルトでは 2 日間に分けて行い、2 日目は地元のクラブを訪問しました。

2007 年度のサロン in 高知（ここからこういう呼び方）もかなり濃い企画でした。高知県サッカー協会会長（当時）だった成田十次郎先生にお話を伺うというものです。クラマー招聘のいきさつ、読売サッカークラブ創設に至る経緯、高校サッカー首都圏開催の裏話など、この企画のおかげで、高知の方々が“成田十次郎”の本当の偉大さを知ることとなり、高知で開催できてすごく良かったと思います。いま、高知新聞で成田先生の自叙伝が連載されていますが、そこにもクラマーのことや東京教育大での学生生活のことなどが書かれています。この連載のきっかけになったのがサロン in 高知です。

2008 年度は、岡山・金沢・熊野に行きました。地域リーグを経て、JFL から J2 に上がりましたけど、ファジアーノ岡山を取り上げたのが 7 月のサロン in 岡山。1 月の金沢では、スポーツとアートの連携を取り上げたシンポジウムを開催しました。

そして、後ほど報告する熊野。このような感じで、サロン in 岡山、サロン in 金沢、サロン in 熊野が行われました。

ただ、このような言い方をしているのはサロンの側からだけで、金沢の企画に関しては、金沢 21 世紀美術館の主催行事ですし、熊野の方も、主催は筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ、および日本サッカー史研究会です。それにサロンが、ビバ！サッカー研究会とともに協力しているというスタイルです。

# 第Ⅱ部　サロン in 熊野報告

## １．サロン in 熊野の概要

「サロン in 熊野」と呼んでいる企画の正体は、「日本サッカー史シンポジウムー中村覚之助と日本サッカーの夜明け」とそれに付随するイベントのことで、平成 21（2009）年 3 月 21 日（土）、15：00～17：00 に開催されたシンポジウムがその中心です。

地元の方々が本当によくやってくださって、シンポジウム前のお墓参り、シンポジウム後の懇親会、翌日の熊野三山めぐりなど、大変充実したイベントとなりました。熊野三山めぐりは、ただ巡っただけでなく、正式参拝です。1 つのお社だけ参拝するのだとバチが当たるらしく、三山一寺のすべてを訪問し、「サロン」として正式に参拝してきました。たぶんものすごくお金がかかっているんだろうと思います。その部分はぼくらには分かりません。

熊野というのは、和歌山県の南部地方の総称で、那智勝浦町や新宮市が今回の訪問先となりました。
とにかく遠いんです。参加された方は、どうやって行くかということをそれぞれ考えました。
阿部さんは、青春 18 切符でしたね。国島さんはどのようにして行かれましたか。

国島 : 1 日前に高速バスで名古屋に行って、岐阜へ移動して杉原千畝記念館を見てから参加しました。

私（中塚）は、牛木さんと、茗友サッカークラブ会長の森岡理右先生、いずれも 70 半ばの高齢の方と付き人の学生、および日本サッカー史研究会の方々とともに、前日の 21 時半に池袋に集合して夜行バスに乗り込み、翌朝 8 時に那智勝浦に着きました。

高橋：那智勝浦への直行便があるんですか。

あるんです。これが一番便利だということを牛木さんに教えてもらいました。
バスに乗り込む前、私は池袋の居酒屋で飲んでいたんですけど、バス用の飲み物を買っておくのを忘れてしまいました。サービスエリアでビールが買えるだろうと思っていましたけど、高速道路なので酒は売っていないですね（笑）。
あと、私の後ろの座席に座っていたご婦人が大変神経質な方で、ぼくと森岡先生がものすご～く小さな声でひそひそ話をしていると、「あんたたち、うるさいわよ！」みたいな感じで怒られました。居場所のないままウトウトし、気がついたら着いていました。
8 時半頃に到着しましたが、シンポジウムは 15 時からなので時間があります。そこで、宿泊先のホテル浦島に行き、温泉を楽しむことにしました。ここは館内だけで温泉めぐりが楽しめる広いホテルで、帰るのを忘れるほどすばらしい温泉ということで名付けられた「忘帰洞」という洞窟の温泉を楽しみました。
それでもまだ時間があったので、当初予定にはなかった中村覚之助のお墓参りをし、ご実家（統太郎さん宅）を訪問させていただくことになりました。中村覚之助さんの本家の当主である中村統太郎さんが 8 時半に迎えに来てくださり、案内してくださいました。あとでも出てきますが、中村覚之助の学生時代（つまり約 100 年近く前）の博物学のノートや、嘉納治五郎名での賞状など、非常に価値あるものが保管されていて、刺激的でした。

## ２．日本サッカー史シンポジウム

日本サッカー史シンポジウムの主催、後援、協力はこのように（主催：筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ、日本サッカー史研究会。後援：日本サッカー協会、日本サッカーミュージアム、和歌山県サッカー協会、紀南サッカー協会、熊野三山協議会、那智勝浦町教育委員会。協力：ビバ！サッカー研究会、スポーツ文化研究会・サロン 2002、NPO 法人つくばフットボールクラブ、ホテル浦島、中村覚之助を顕彰する会）なっています。「中村覚之助を顕彰する会」を表に出してしまうと「やらせ」のような印象を与えかねないので、中村覚之助の出身校である東京高等師範（現：筑波大学）の後輩たちである「筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ」の主催としました。私が茗友サッカークラブの幹事長を務めていることもあり、森岡会長にご登壇いただき、また会員の方も何名か熊野へお越しくださいました。また、歴史を探るということなので「日本サッカー史研究会」も主催者に名を連ね、準備が進みました。
シンポジウムのポイントとしては、１）中村覚之助はどのような人物だったのか、２）八咫烏がなぜ JFA のシンボルマークとなったのか、です。

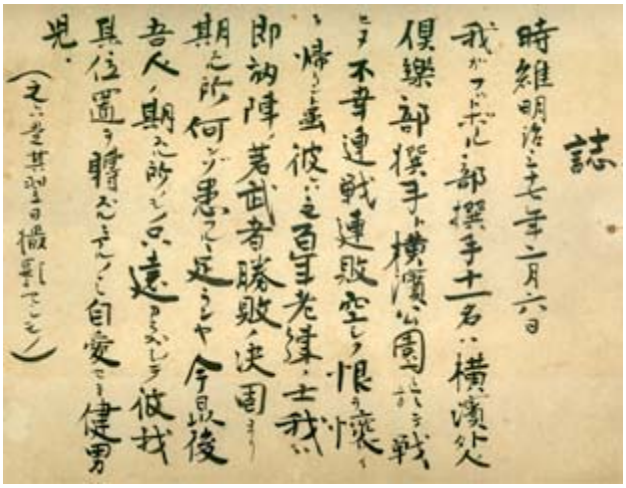
阿部：元々の経緯、なぜこれをやろうか、ということに、牛木さんと中塚さんが絡んでいます。一昨年の日本フットボール学会で、篠田昭八郎さんが中村覚之助のことを発表されたことをきっかけに、牛木さんが日本サッカー史研究会に篠田さんをお呼びすることにしました。そのとき篠田昭八郎さんが、中村統太郎さんも連れてきてくれました。その後、中村統太郎さんが毎月の研究会に来てくれるようになりました。中塚さんは、篠田さんの時はいなかったんですけど、中塚さんが参加された成田十次郎さんの話のとき、終了後にお茶の水の居酒屋に行って、中村統太郎さんと日本サッカー史研究会と中塚さんのつながりができました。

ちなみに、最初に篠田先生がフットボール学会で発表されたときに、ぼく（中塚）が座長をやっていたんです。それまでは中村覚之助のことは何も知らなかったのですが、「最初のサッカーの試合のときのキャプテンは、サッカーのプレーをしたことがなかった」（篠田氏）ことなどがすごく印象的でした。こんな方が我々の先輩にいて、日本サッカー史の始まりのところに関わっていたのだということは頭の片隅に残っていたんです。

明治 37 年 2 月 6 日　日本初のサッカーの試合の記念写真（上の段向かって右から三人目の学生服学生帽の人物が中村覚之助氏）
（那智勝浦町 HP より）

それで、阿部さんも言われた、成田先生が話をされた会の後の飲み会で、阿部さんや牛木さんやあと何人かいる中で、初対面の、関西弁の方がおられ、お名前が中村統太郎さんということで…。いろいろ話をしていくうちに、実は中村統太郎さんが、件の中村覚之助さんの末裔だということが分かっていったんです。末裔というのは、正確に言うと、覚之助さんは 29 歳で亡くなっているのでお子さんはいらっしゃいません。覚之助さんのお兄さんが本家を継いでおられて、そのお兄さんが統太郎さんのおじいさんだということでした。

そして、これもこの間行ってわかったんだけど、統太郎さんのお宅には、おじいさんの弟（つまり覚之助）の遺品がたくさんあるのです。ところが最初はそれらの意味がよくわからないまま、統太郎さんも過ごしておられたのです。例えば、このような写真（1904 年の東京高師 vs 横浜外人クラブの試合翌日の集合写真）で、裏には、この写真の背景についての但し書きが書かれているものがお宅にありました（いまはサッカーミュージアム所収）。その意味がわかったのは、轡田（くつわだ）隆史さんという方が書かれた本の中に、日本人が最初にやった試合は 1904 年の横浜外人クラブが相手で、2 月 6 日だったという記述があり、それを読んだ統太郎さんが、家にあるこの写真は、その試合のことを言っているのではないかと気づき、轡田さんに連絡を取り、それでようやくこの写真が表に出ることになったのです。



上の写真の裏面（那智勝浦町 HP より）

そのあたりから、統太郎さんの覚之助探しが始まったという感じですかね。

その写真で笑えるのは、コートを着ているのが覚之助さんです。覚之助はプレーをしないらしいんです。

高橋：コーチをしていたんですか？

中塚：主事というポストだということです。

阿部：監督とマネージャーを合わせたようなものだと聞いています。

## ３．シンポジウムのＤＶＤ上映（映像をみながらのコメント）

**◆オープニング**

中塚：この映像はよくできていると思いますが、80 歳を過ぎた地元の方が、DVD を編集しているんです。ものすごく上手にできています。

**◆中村覚之助の紹介場面**

中塚：中村覚之助は、和歌山師範学校（現；和歌山大学教育学部）を卒業されて、一度地元の小学校（宇久井尋常高等小学校）の先生になっているんです。その後、1900（明治 33）年に東京高等師範学校に入り直して、先ほど見せた写真（対横浜外人クラブ）が 4 年次のときのものです。ちなみにその 2 年前（1902）に、坪井玄道教授が欧州視察から持ち帰ったサッカー関係書物を翻訳して仲間を集め、サッカー部を創設し、翌 1903（明治 36）年に日本で最初のサッカーの指導書『アッソシェーションフットボール』を発刊、これらの事業を中心となって進めたのは覚之助でした。

**◆八咫烏をめぐって**

中塚：シンポジウムでは、山本殖生さんという地元の学芸員の方が八咫烏の話を紹介されました。こういう話（神武天皇を八咫烏が大和へ導いた話）って、25 歳の室田くんは聞いたことある？

室田：ないですね。聞く機会が少ないですからね。

中塚：そうだよね。牛木さん、森岡さんが小・中学生のころの教科書には出ていたんですよね。

牛木：ぼくらが小学生のころは戦争中ですから、「皇国史観」という、日本の歴史を天皇中心に捉える考え方でした。それで、日本書紀や古事記に出てくるような神話を、小学生に歴史として教えた。中学になると「国史」になって、国史の教科書というのは天孫降臨から始まるんです。宮崎県に天照大神の子孫が降りてきて、というところから始まります。今だったら「神話」で、副読本に載せる程度だと思いますが、その当時は修身の教科書に載っていました。1 ページ目を開けると、見開きで神武天皇が弓を持って立って、その上に金鵄が描かれていました。ぼくら以上の年代の人にとって、八咫烏は常識だと思うんです。突然出てきたと思う人はいないです。

中塚：今回行って、こういう話をお聞きして、お参りさせてもらって、改めて神話の話に興味を持ちました。本屋に行って、神話に関する本を何冊か読んでみたんだけど、メチャクチャ面白いんですよね。ぼくの場合は教科書じゃないけど、小さいころ、『日本の神話』という本（絵本）で見たような話が出てきて…。天照大神から始まって、八岐大蛇がどうのこうのっていう断片的にしか

覚えていない話の中で、こういうところにたどり着いて、まさしくこれは日本人の大切なストーリーなんだ、ということを実感しました。
このシンポジウムのポイントだけ続けますけど、フロアの方から、八咫烏が何で日本サッカー協会のシンボルマークになっていったのか、という質問がありました。そのところで、内野台嶺という人物が登場してきます。日本サッカー協会を組織化するときに中心的な役割を担った方で、その方が取り入れたんじゃないのかという説があります。

（注：日本サッカー協会の HP には、「ボールを押さえている三本足の烏は、中国の古典にある三足烏と呼ばれるもので、日の神＝太陽をシンボル化したものです。日本では、神武天皇御東征のとき、八咫烏（やたがらす）が天皇の軍隊の道案内をしたということもあり、烏には親しみがありました」（出典：日本サッカー協会　組織　シンボルマーク　http://www.jfa.or.jp/jfa/organization/index.html）とある。）

牛木：内野さんが八咫烏を取り入れたかどうかはわからないけど、シンボルマークを作ろうとしていたことは間違いありません。

中塚：八咫烏について、ホームページを書き換えてもらおうというアクションプランがあります。

**◆中村覚之助が残した品々を見て**

牛木：嘉納治五郎が送った手紙も残っています。

中塚：（東京高師在学中は博物学を専攻、そのときの授業ノートをみて）こういうのって、牛木さんもおっしゃっていたけど、博物学サイドからしても、約 100 年前にどんな授業をしていたのかを知る、貴重な資料になると思います。こういうのを見ると、『アッソシェーションフットボール』をまとめた中村覚之助の能力の高さを知り得ますね。ものを書くことであったり、ものごとを整理する力をお持ちだったと思いますね。

**◆嘉納治五郎署名の「泳力優秀」の表彰状をみて**

中塚：遊泳部にも入っていたんです。

牛木：目の前が海ですから（笑）

中塚：1896 年に蹴球部創部ということにしているけど、それは放課後いくつかの部に学生は所属して活動しなさいといったところで、当時の生徒は複数の部に属していたんですね。マルチスポーツライフですね。

熊谷：大会に出るのは全校の中で上手い人を集めていたんです。

牛木：その当時校友会というのができたときは、イギリスの制度の模倣なんですよね。イギリスであるものを訳すから、校友会ができて、そのなかにいくつかの部が書いてあるけど、実際には剣道、柔術、弓術があって、西洋式なスポーツだと、テニスとボートと野球がくらいしか活動していないです。イギリスの本にあるから、フットボールは必ずといっていいほど書いてあるんですけど、実際には活動していないんですよね。でも、この遊泳部はちゃんとやっていたはずなんですよ。

中塚：そのころ千葉の富浦寮で、附属中学の臨海活動が始まったんじゃないかな。

◆シンポジウムの映像を見終えて

中塚：シンポジウムはこのような感じでした。中村覚之助という人物をもう少しクローズアップしてみて、なんとかサッカー殿堂入りできるようにしたいなと。そのためには、もう少し歴史をひもといていかないとできないかなと考えています。それと、八咫烏の話にしても、もう少し日本の歴史との関連で、もうちょっとクローズアップできないかなと考えています。そんなところが、このあとのアクションプランになってくるかなと思います。

## ４．公式参拝等のＤＶＤ上映（映像をみながらのコメント）

中塚：公式参拝を行ったということで、その映像をみていきたいと思います。この映像はマンダラ TV の方が作ってくれたものだと思います。

◆師範学校に通う人の話から

牛木：ぼくは、昔は、師範学校は授業料を取らないから、貧しい家庭の優秀な人を、村の有力者が協力し合って進学させていたのだと思っていたんです。ところが、実は師範学校に行くと当時は兵役が免除されるので、いい家の長男を送っていたということです。

◆中村覚之助宅訪問の映像

中塚：英字新聞が中村さんのお宅に残っていて、これは何かって伺ったところ、オーストラリアに出稼ぎに行っていたお兄さんの関係のものだということでした。当時、和歌山のあの奥地から東京に、覚之助さんをはじめ、妹さん含め 2～3 人が、中村家から上京して勉強していました。お金がかかります。しかし熊野では現金収入がありません。そこでお兄さんがオーストラリアに行って稼いでいたそうです。だから英字新聞などがたくさんあるとのことです。

◆3 箇所目の参拝の映像

中塚：この宮司さん、みたことありませんか。2002 年のワールドカップのときに、八咫烏の話で神社側でお話をされていた方だと思うのですが。この顔は見覚えあるぞ、と思いました。3 社まわりましたけど、ここが一番商業主義化しているように感じました…。八咫烏の商品化とか。宣伝も結構多いんですよ。

◆映像を見終えて

中塚：このように熊野三山正式参拝をさせてもらった次第です。地元の方も大変喜んでいただいて、またこういう機会をつくれたらなと思いました。

## ５．「八咫烏」と JFA シンボルマークをめぐって

中塚：何か補足があれば、お願いします。

阿部：日本サッカー協会のホームページには、八咫烏が古事記や日本書紀に起源があるとは一切書かれていないですね。それで、サッカー協会のホームページを書き換えてもらおうという話があるんですけど、ネットでいろいろと調べていますと、すでにそういうことを JFA に対して言ってい

る方もおられるようです。この話題は、2002 年のワールドカップのときに、2 チャンネルでも盛り上がっていたようです。「自由主義史観研究会」の方のコメントが 2 チャンネルでも多く取り上げられていました。右翼がかった人、皇国史観の勉強をしているような人たちが、何で中国に起源があるんだという文句の形で伝わったようで、それに対して JFA は、反応はしているみたいなんですけど、はっきりとした答えがないようです。これは、靖国問題のからみとかもあるから拒んでいるのでしょうか。我々みたいなサッカーを愛する者が言ったら別なのかわからないですけど。ただ、JFA では広報の人がこの問題に対して答えてはいるようなんですが、はっきりとした答えは持っていないようです。

牛木：淮南子（注：えなんじ；紀元前 2 世紀ころに書かれた中国の思想書）に載っていると書いたのは、田邊五兵衛（注：田辺製薬の社長）さんです。田邊さんが、サッカー協会の雑誌に「烏球亭（うきゅうてい）雑話を連載していたんですが、その中の 1 項目に「マークの由来」というのがあり、三本足の烏の話が淮南子に出ていると紹介したんです。だけどそれは、三本足の烏の話が中国にもあるよ、というだけの話です。内野台嶺さんが淮南子から取ったという根拠なんて、どこにもないんです。しかし、根拠はないんですけど、状況証拠的に考えると、当時中国の紀元前の本から取ったよりも、修身の教科書から取った方が自然なわけです。修身の教科書の方が身近なもんですから、八咫烏で間違いないとぼくは思うんですが。なぜ日本サッカー協会が八咫烏だと言いたくないかというと、理由としては 2 つ考えられます。1 つは、知らないから。田辺さんの記事しか知らない。もう 1 つは、戦後になり、皇国史観が軍国主義に利用されたということから。特に教育関係者は、日本神話には触れたがらない。そうしたことから、遠ざけていると考えます。阿部さんから教えてもらったことですが、協会に電話をした人は、満足いく答えを得られないから手紙を出した。それで、また電話をしたり、しつこくやっているわけです。しつこくやったら、電話で応対した人が、われわれの出したパンフレットには八咫烏と書いてあります、と言ったので、じゃあそのパンフレットを送ってくれと言ったら、もうないと言ってきました。じゃあ、ホームページの方は簡単に直せるわけですから、直しているかなと思ったら、直していない。これはサッカー協会が意図的にそうしたのか、広報の担当がお粗末でいい加減なことを言ったのか、よくわからない。今度確かめてみようかなとは思っています。

阿部：ちなみに、今の現役の和歌山市長が、那智勝浦町出身の大橋建一さんという方です。その方が 2004 年の春に和歌山市議会で、市の活性化策に関連して、「五輪やW杯の年の定例行事化して日本代表チームが関空から和歌山市経由で八咫烏のご本尊・熊野三山に必勝祈願参拝をしてもらうよう県に働きかけられないか」という質問を受けた、という記事があります。大橋さん本人は、私的には大いに賛成だが、政教分離とか憲法上の問題を考えると、祈願を市長が働きかけることはできず、答弁に困った、と言っています。この人は、中村覚之助さんの出身地である那智勝浦出身なので、サッカー協会のホームページはあまりにも不自然な話だと言っています。中村覚之助が那智出身であることを考えれば、八咫烏にちなんでサッカー協会がシンボルマークを作ったのは明白ではないか。にもかかわらず、それに触れずに中国の伝説を持ち出すのは、神話や神社というものに神経質な人たちの抗議に脅える「事なかれ主義」に見える、と彼のホームページ（http://www.ken-ohashi.jp/contents/2b/yodandokudan/yatagarasu.html）に書いてあり、こんなことまで書いていいのかなって感じがします。

牛木：中塚さんは、こういったことを知っていて、シンポジウムでサッカー協会のホームページのことを出したんですか。

中塚：知らなかったです。ただ、あのホームページは何かおかしいなと思っていました。

今日はこれで終わりにします。日本サッカー史研究会とも協力して、政治的でない形で、サッカー的な観点で純粋に活動できればなと思っています。

以上、第 150 回月例会でした。ありがとうございました。

（牛木補注）

その後、日本サッカー史研究会の 4 月例会で、福島寿男さんから「協会の標章のカラスは日本の神話の八咫烏に基づく」ことを補強する事実の発表があった。標章をデザインした日名子実三（昭和初期の著名な彫刻家）が、同じころ、ほかに明らかに日本の神話をテーマにしたスポーツのメダル等のデザインをしている資料が残されている。

以上